

『あざけられた救い主』

’21/10/17

聖書箇所: マルコの福音書 15 章 1-15 節 (新約 p.100)

少し前、新型コロナが流行し始めた時、私たちは“未知のウイルス”の流行を防ぐべく、できるだけ外出を控えました…。レジャーや旅行を控え…。学校は一斉に休校となり…。なるべく、子どもたちも家で遊ばせるようにし…。できることなら、仕事も家でするようにしました…。

そんな中、SNS でこんな話が拡散されます、「トイレットペーパーの原料は、中国から来ているから、トイレットペーパーが品切れになる」って…。すると、大勢の人たちがトイレットペーパーを買い求めて、本当に、一時期、トイレットペーパーの品切れが起こりました。しかし、その時に、多く報道されたのは、実は、トイレットペーパーは、ほとんどが国内生産されているので、外国からの輸入がストップしても、全く問題無い！ということでした。…しかし、そう報道されていても、トイレットペーパーの品不足は、しばらく続きました…。皆さんも覚えておられるでしょ？

こういったことを、心理学では、「集団心理、あるいは、群集心理」と呼ぶのだそうです。…その言わんとしていることは、「多くの者たちが、その集団の中で多数派の意見に同調してしまっ、合理的な思考力や判断力が抑制されてしまっ、集団全体として極端な行動を引き起こす特殊な心理のこと」を言うのだそうです。実は今日、私たちも、聖書の中に、そういったような「集団心理、あるいは、群集心理」のような典型を見ていくことになると思います。

命題: 十字架の直前に、救い主であるイエス様をあざけた者たちとは？

このマルコ伝を学び始めて、おおよそ1年半…。私たちは、とうとう、この福音書の 15 章まで、ご一緒に学んできました…。いよいよ、来週の礼拝で、私たちは救い主としてこられたイエス様が、あの十字架に磔にされるシーンを見ていきます。…そこで、今日は、その直前のみことばを皆さんと一緒に見ていこうとしているわけです。

今日のみことばが私たちに教えてくれていることは、イエス様があの十字架にかかったださうとしていた直前に、その救い主であられるイエス様のことを、どのような者たちがあざけたか？ということでもあります。そうすることで、今一度、私たちは、私たち人間という存在が如何に愚かで、傲慢かつ罪深いか？また、本物の信仰を持たない人間が、如何に移ろいやすく…。また、周りに流されやすい存在であるのか？ということなどを一緒に確認していきたいと思います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばである、マルコ 15:1-15 をお開きくださいますでしょうか？

I・ローマの総督であった **ピラト** ! (マルコ 15:1-5)

どうぞ、まずは、今回のみことばの内、1-5 節の部分に注目していきましょう…。このみことばは、当時、あのローマから派遣されて、パレスチナ地方の総督を任されていた“ピラト”について教えてくれています。そこには、このように記されています。

- 1 夜が明けるとすぐに、祭司長たちをはじめ、長老、律法学者たちと、全議会とは協議をこらしたすえ、イエスを縛って連れ出し、ピラトに引き渡した。
- 2 ピラトはイエスに尋ねた。「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」イエスは答えて言われた。「そのとおりです。」
- 3 そこで、祭司長たちはイエスをきびしく訴えた。
- 4 ピラトはもう一度イエスに尋ねて言った。「何も答えないのですか。見なさい。彼らはあんなにまであなたを訴えているのです。」

5 それでも、イエスは何もお答えにならなかった。それにはピラトも驚いた。

●この時の 状況

どうぞ、まずは、今読んだ1節に注目していただけます？まずは、この時の“状況”について、確認をしていきましょう。当然のことながら、このみことばは、私たちが先週学んだマルコ 14 章最後の部分と繋がっています。先週、私たちは当時の祭司長たちや「サンヘドリン」という、今の日本で言うところの最高裁判所のような『議会』が、幾つもの罪やルール違反を犯して…。無理矢理に、あのイエス様のことを有罪！そして、死刑に定めた！ということを知りました。…しかし、この当時のユダヤは、ローマに支配されていたので、彼ら祭司長たちの権限だけでは、イエス様に死刑執行を下すことができませんでした。そのため、祭司長たちは、夜が明けてすぐ！イエス様をローマの総督であったピラトのところへ連れていったのです。

実は、この当時、ピラトは、「カイザリヤ」という地中海沿いの町で暮らしておりました。…恐らくは、この時、エルサレムで「逾越の祭り」という大きなイベントがあったので、そのために、一時的に、エルサレムに滞在していたのだと思われます。

どうぞ、今度は 2 節に注目してみてください。…ここで、ピラトは、イエス様にこんな質問をしています、『あなたは、ユダヤ人の王ですか？』って…。ひょっとしたら、皆さんは、ここである種の“違和感”を覚えられるかも知れません。…と言いますのは、先週、私たちは、あのイエス様がかけられた“不当な裁判”について学んだわけですけれども、そこでは、大勢の証人たちがたくさんの偽証をしたにも関わらず、証言の一致が見られずに、混乱していたでしょ？

しかし、その裁判の最後で、こんな質問を当時の大祭司であったカヤパはイエス様に対して、しました。マルコ 14:61、『あなたは、ほむべき方の子、キリストですか？』って…。その質問に対して、イエス様は、簡単に言うと、「はい！わたしは神の子、キリストです！」というようなお答えをされたのです！だから、大祭司は、自分の衣を引き裂いて、「このイエスが神を冒瀆した！」と言って、大激怒するわけです。…それで、とうとう、イエス様が有罪とされて、死刑に処せられることが決まったわけです。…そうだったでしょ？

でも、そういったことは、あくまでも、ユダヤ人たちの間で分かるような…。ユダヤ人だから“こそ”の罪であり…。問題でありました。…だから、「この者は、自分のことを神と言いました！神を冒瀆したのです！」ということ、ローマ人であったピラトに訴えても、それは大した理由になりません。…と言いますのは、ローマは「多神教」、つまり、たくさんの神々を信じるような国家であったからです！

だから、彼ら祭司長たちは、イエス様のことをローマに訴えるに当たって、ローマが「これは重罪である！」と認めるような罪でもって、イエス様のことを告発する必要があったのです。それが、「ユダヤ人の王」ということなのです。

ですから、今日のみことばの平行記事であるルカ伝には、今見ている内容が、もう少し詳しく、こんな風に記されています。ルカ 23:1-3、『1 そこで、彼らは全員が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。2 そしてイエスについて訴え始めた。彼らは言った。「この人はわが国民を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることがわかりました。」3 するとピラトはイエスに、「あなたは、ユダヤ人の王ですか」と尋ねた。イエスは答えて、「そのとおりです」と言われた。』って…。

⇒皆さん、分かっていただけます？…何と、この時、祭司長たちは、イエス様のことをローマに訴えるに当たって、①国民を惑わしているとか、②カイザル、つまり、ローマの皇帝に税金を納めることを禁じたとか、③自分は王キリストだ！と言っていると主張したのです。…でも、そんなこと、先週に学んだ裁判の中で出てきました？…出てきてないでしょ！…しかも、イエス様は、少し前のマルコ 12 章で学んだように、「カイザルのものはカイザルに返しなさい！」とおっしゃって、むしろ、ローマに税金を納めるべきことを教えられたのです。…そうでしょ！

●ピラトが抱えていた 問題

彼ら祭司長たちの訴えで、唯一、ピラトが興味を示したのは、イエス様が自分のことを「自分こそは王である。キリストである。」と主張されたかどうか？だけです。だから、ピラトは、イエス様に、『あなたはユダヤ人の王ですか？』と尋ねたのです。この当時、ローマから遣わされて、このパレスチナ一帯を治めていたピラトからすれば、このイエスという男が、ローマにとって脅威となるかどうか？ということが、1番の関心であったと思われます。彼は、「ローマの総督である」という地位に固執しているような人物であったのです。

実は、このピラトという総督ですが…、他のみことばにも出てくる通り、彼のフルネームは「ポンテオ・ピラト」と言ひまして、彼は歴史上の文献によりますと、紀元 26-36 年の間、ユダヤを含むパレスチナの総督であったようです。しかし、このピラトは、いきなり、ローマのやり方をこの地方に持ち込んだことで、かなり、ユダヤ人たちの反感を買ってしまったのだそうです。例えば、神殿の中に、ローマの神々と偶像を刻んだ盾をつるしたり…、またある時は、神殿のための税金だったものを水道の建設に使ったりしたそうです¹。

それ以外でも、例えば、ルカ 13 章には、「このピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちの捧げるいけにえに混ぜた」というような記事が記されてあります。…恐らく、このピラトは、ローマ兵たちを使って、ガリラヤ人たちがいけにえを捧げている時に、そのガリラヤ人たちを殺害させたということであったようです。

このように、このピラトという人物は、最初、強引にユダヤ地方を治めていたようです。しかし、そういったことに反感を持ったユダヤ人たちが、直接、ローマに対して何度も直訴をしたようで…、そのため、「ピラトは総督にふさわしくない！」という嫌疑…、言わば、疑いをかけられていたようで、ピラトは、その総督という地位にいつまで就いていられるか危うかったそうです。そのため、次第に、このピラトは、ユダヤ人たちの顔色をうかがうようになっていったと思われる。

ま、このように、ピラトは、イエス様のことを必死になって訴え続ける祭司長たちの思惑に対して、非常に“困惑”をしていました。…と言うのも、このピラトは、このイエス様という人物がローマにとって、脅威でないことや、祭司長たちが何か別の目的で、イエス様のことを訴えていたことを分かっていたからです。

だから、今日のみことばの 14-15 節をご覧ください。そのみことばには、このピラトが、群衆たちの声に負けてしまって、イエス様のことを、まあ言えば、洗々、十字架刑につけることを認めた、というようなことが記されてあります。『14 だが、ピラトは彼らに、「あの人^{こゝしゆ}がどんな悪い事をしたのか」と言った。しかし、彼らはますます激しく「十字架につける」と叫んだ。15 それで、ピラトは群衆のきげんをとろうと思い、バラバを釈放した。そして、イエスをむち打って後(のち)、十字架につけるように引き渡した。』って…。

このように、このピラトは、イエス様が無罪であること…、また、十字架に処されるような悪事を何も犯していないことを分かっていたのです！…にも関わらず、彼は、そのイエス様のことを、最後には、十字架につけるよう判断をしてしまいます。…ひょっとしたら、彼は、今の日本で言うところの「中間管理職」のような立場に居て、上からのプレッシャーや下からの突き上げや訴えに苦しんでいたのかも知れません…。

II・ガリラヤの国主^{こゝしゆ}であった **ヘロデ** ! (ルカ 23:6-12)

どうぞ、今度は、今日のみことばではないのですが…、ちょっとマルコ伝には書かれていないことを補いたいので、その平行記事であるルカ 23:6-12 のみことばを見ていきましょう。そこには、この当時、ガリラヤの国主であった“ヘロデ”のことが記されてあります。そこには、こう記されてあります。

¹ 新聖書辞典の「ピラト」の項目から

- 6 それを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ねて、
- 7 ヘロデの支配下にあるとわかると、イエスをヘロデのところへ送った。ヘロデもそのころエルサレムにいたからである。
- 8 ヘロデはイエスを見ると非常に喜んだ。ずっと前からイエスのことを聞いていたので、イエスに会いたいと思っていたし、イエスの行方何かの奇蹟を見たいと考えていたからである。
- 9 それで、いろいろと質問したが、イエスは彼に何もお答えにならなかった。
- 10 祭司長たちと律法学者たちは立って、イエスを激しく訴えていた。
- 11 ヘロデは、自分の兵士たちといっしょにイエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はでな衣を着せて、ピラトに送り返した。
- 12 この日、ヘロデとピラトは仲よくなった。それまでは互いに敵対していたのである。

●ヘロデが持っていた 関心

実は、ここで言われているヘロデとは、歴史的には、「ヘロデ・アンティパス」と言ひまして、あの幼児であったイエス様のことを殺そうと企んだヘロデ大王から見て、第4番目の妻の子に当たります。さて、このヘロデですが、彼は、この時、イエス様の出身地とも言えるガリラヤやペレヤという地域を治めている「国主」という立場におりました。国主というのは王に次ぐ地位で、時には、敬意を込めて、「王」と呼ぶこともありました。だから、マルコ 6:14 には、このヘロデのことが『ヘロデ王』として書かれてあります。

ローマの総督ピラトは、イエス様を裁くに当たって、非常に困惑をしました…。だから、このイエス様が、ガリラヤ地方のナザレ出身だということを知って、その判断を、できれば、ヘロデに任せようとしたのです。先に言いましたように、この時は、「過越の祭り」ということで、このヘロデもまた、エルサレムへ来ていたのです。

この 8 節のみことばが教えるように、このヘロデは、イエス様に対して強い“関心”を持っていました。…しかし、彼の関心は、イエス様が真の救い主であるかどうかを知って、救われたい！というようなものではなくて、ただ単に、イエス様の行なう奇蹟を見たかっただけでした。

皆さんも、よくご存知だと思います。この当時、イエス様の周りに居て、そのイエス様のことを慕っているように見えた群衆たちもまた、その多くは、イエス様の行なう奇蹟や癒しを見たかったからです。だから、イエス様は、ヨハネ 8 章で、自分(つまり、イエス様)のことを信じます！と言って、イエス様の後を付いてくる者たちに対して、『もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。』(ヨハネ 8:31)ということをおっしゃられたのです。ここでイエス様が、「わたしの言葉に留まるなら…」という条件を出されたことに、どうか、“注目”してください。

と言いますのは、イエス様は、このような条件を、その直前のヨハネ 8:30 を見てくださったら分かる通り、イエス様のことを“信じた”はずのユダヤ人たちに向かっておっしゃられたからです。…だから、どうか、皆さん、思い出してください！例えば、ヨハネ 15 章…、あのぶどうの木^{こゝしゆ}の例えの中で、イエス様は、どんな者が本当に救われていると教えてくださいました？⇒①イエス様に留まり…、また、②イエス様のみことばに留まっている者でしょ！…そういったことは、マタイ 7 章で、「わたしに向かって、主よ！主よ！と言う者が皆、天の御国に入るのはではない！わたしの父の“みこころを行なう者”が天の御国へ入る(=救われる)のです！」ということを教えてくださいました、イエス様の教えとピッタリ合致しますでしょ？

さもすると、私たち日本人のクリスチャンは、ある人たちが、聖書の教えやキリスト教に対して、好感を持っていただけで、まるで、その人たちが救われたかのように思うてしまうことがあります。しかし、聖書のみことばはそう教えるでしょうか？いいえ！聖書のみことばが教えてくれるのは、本物の信仰だけです！

本物の信仰だけが、私や皆さんのことを救うことができます！…しかし、みことばは、明らかに、私たちの周りには、私たちのことを救うことができる「本物の信仰」と、私たちのことを救うことができない「行ないのない、死んだ信仰」がある！ということを教えてくれています(ヤコブ2章)。…だから、私たちは、自分たちの信仰をしっかりと吟味しないとイケないのです…。

●ヘロデが抱えていた 問題

さて、このヘロデが抱えていた“問題”に移りますが、残念ながら、この時のイエス様は、ヘロデが期待していたような奇蹟や癒しを行なってはくありませんでした。…と言うのも、この時のイエス様は、そういったような状況には無かったからです。

先週も引用したように、イザヤ53章には、救い主の姿に関して、こんな預言を残してくれています…。イザヤ 53:4-8、『4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになつた。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。8 しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。』

⇒このイエス様こそ…、天の神様が何百年も前から預言してくださっていた約束の救い主なのです！この時のイエス様は、ご自分があの十字架にかかるために、自分のことを弁護したり…、自分の無実を訴えるわけにはいかなかったのです！…そうでしょ！皆さん！

しかし、この当時、ガリラヤの国主でありながら、そういったことを全く知らなかったであろうヘロデは、イエス様のことを侮辱したり、嘲弄(ちょうろう)…、つまり、あざけた挙句、イエス様に派手な衣を着せて、もう1度、ピラトの所へと送り返します。実は、このヘロデという人物は、私たちがマルコ6章で学んだように、聖書のみことばに反して、自分の兄弟の奥さんであった「ヘロデヤ」という女性を妻にしまったため、そのことをバプテスマのヨハネから非難されて、そのため、彼は、そのヨハネを投獄して、その後、その首をはねてしまったことで有名であります。

彼は、ガリラヤ地方を治めるような立場に就きながら、神様のお言葉である聖書を軽んじて、バプテスマのヨハネの首をはねてしまっただけでなく…、彼は、神様が遣わしてくださった約束の救い主を信じるどころか、その救い主を愚弄(ぐろう)するなどして…、罪に罪を重ねて死んでいったのです。

Ⅲ・当時の 群衆たち ! (マルコ 15:6-15)

さて、その次に私たちが見ていきたいのは、もう1度、今日のみことばであるマルコ15章に戻ってくださって…、その6-15節のみことばが教えてくれている、当時の“群衆たち”の問題であります。マルコ15:6-15には、このように記されてあります。

- 6 とこころでピラトは、その祭りには、人々の願う囚人をひとりだけ赦免するのを例としていた。
- 7 たまたま、バラバという者がいて、暴動のとき人殺しをした暴徒たちとっしょに牢に入っていた。
- 8 それで、群衆は進んで行って、いつものようにしてもらうことを、ピラトに要求し始めた。
- 9 そこでピラトは、彼らに答えて、「このユダヤ人の王を釈放してくれというのか」と言った。
- 10 ピラトは、祭司長たちが、ねたみからイエスを引き渡したことに、気づいていたからである。
- 11 しかし、祭司長たちは群衆を扇動して、むしろバラバを釈放してもらいたいと言わせた。

12 そこで、ピラトはもう一度答えて、「ではいったい、あなたがたがユダヤ人の王と呼んでいるあの人を、私にどうせよというのか」と言った。

13 すると彼らはまたも「十字架につけろ」と叫んだ。

14 だが、ピラトは彼らに、「あの人がどんな悪い事をしたというのか」と言った。しかし、彼らはますます激しく「十字架につけろ」と叫んだ。

15 それで、ピラトは群衆のきげんをとうろと思ひ、バラバを釈放した。そして、イエスをむち打つて後、十字架につけるようにと引き渡した。

●祭司長たちに 扇動 されていた群衆

この時代、毎年、過越の祭りの時期には、1人の囚人が釈放されることが決まっていたようです。しかし、実は、そういった方面にも、当時の祭司長たちは根回しをしていたようです。ここ9節のみことばは、何とかして、ピラトがイエス様のことを釈放してやろうとしたということがうかがえます。そのすぐ後の10節にあるように、ピラトは、祭司長たちが妬みから、イエス様のことを死刑にしてやろうとしていることに気づいていたというのです。

実は、この時、群衆が釈放を願ったバラバという人物ですが、ヨハネ伝18章には、「強盗であった」と、簡単に説明されてあります。しかし、恐らく、このバラバは単なる「強盗犯」ではなく、ここ7節のみことばが教えてくれているように、「暴動を起こして、人殺しをした暴徒たちと一緒に行動を共にしていた…」と思われる。恐らく、ここで言われている「暴動」とは、自分たちのことを支配していたローマに対するものであったと考えられます。…だから、一部の者たちは、祭司長たちに扇動されて、従順なイエス様ではなく…、ローマに立ち向かってくれるようなバラバの方を釈放しろ！と叫んだのではないのでしょうか？

しかし！いずれにしろ、当時の群衆たちは、祭司長たちによって“扇動”されておりました。…皆さんもご存知のように、祭司長たちは当時、大きな力を持っていたのです。…これと似たような話で、例えば、皆さんは、こんなエピソードをご存知だろうかと思ひます。

どうか、皆さん。できましたら、ヨハネ9章をお開きください。…あそこで、イエス様は、生まれつきの盲人に会われ、彼の見えなかった目を癒してください。その、かつて盲人であった者も…、また、その両親も、どれほど嬉しかったでしょう？非常に感動的なストーリーです。

しかし、そのことで、ユダヤ人たちの間に論争が起こります。「生まれつきの盲人を癒すなんていうことができるのは只者ではない！」いや！安息日に人を癒すなんて、神に仕える者がするはずがない！ということ。そこで、一部のユダヤ人たち(≒パリサイ人?)が、その盲人であった者の両親たちを呼びだして、「本当に、あなたたちの息子は、生まれつき目が見えなかったのか？」ということを問いただします。しかし、その時、その両親は、「確かに、私たちの息子は生まれつき目が見えませんでした。…が、それが、一体どうして、目が見えるようになったか分かりません。どうぞ、本人に聞いてみてください…」って…。こんなやり取りを聞いて、なんとなく、両親の対応が冷たく感じませんか？

しかし、その両親の返事が素っ気なかった理由について、ヨハネは、こう説明してくれています。ヨハネ9:21-23、『21 しかし、どのようにして目が見えるのかは知りません。また、だれがあれの目をあけたのかわりません。あれに聞いてください。あれはもうおとなです。自分のことは自分で話すでしょう。』22 彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者があれば、その者を会堂から追放すると決めていたからである。23 そのために彼の両親は、「あれはもうおとなです。あれに聞いてください」と言ったのである。』⇒このみことばが教えてくれているように、この当時、ユダヤ人たちが、そのコミュニティである会堂から追放されるということは、大変なことであります。…私が思ひますのは、恐らく、この当時の祭司長たちもまた、彼らの意志に反する者たちのことを会堂から追放するだけの権限・権力を持っていたのではないかと…ということ。…

● 確固とした 信念 の有る無し

しかし、いくら、当時の祭司長たちが大きな権限や権力を持っていたとしても、要は、それ以上の、確固とした“信念”を当時の民衆たちが持っていれば、簡単に、流されてしまうことも起こり得ません。そうでしょう！…実際、この後、使徒 4 章などを見てみますと、聖霊の内住を受けたペテロとヨハネたちは、当時の大祭司たちから呼ばれて、「今後一切、イエス・キリストの名によって語ったり教えたりしてはならない！」(使徒 4:18)と命じられたとあります。言わば、脅迫です！…しかし、それを聞いたペテロとヨハネは、どう彼らに返答しました？⇒使徒 4:19-20 にこうあります、『19 ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。20 私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。』』と言いつつ切ったのです！

つい最近でも学んだように、確かに、この当時の祭司長たちには大きな権力がありました。…しかし、それが何なのでしょう！…もしも、私たちが真の神様を信じ、その御方に従おうとするのなら、例え、相手が大祭司であろうと…、あるいは、ローマ皇帝であろうと…、あるいはまた、アメリカの大統領だって関係ありません！そうでしょう！…彼らができることは、たかが、私たちの…、この地上でのいのちを奪うことくらいです…。そうじゃありません？

それに対して、私たちの神様は、そのたましいを滅ぼすことが御出来になります。だから、イエス様は、ルカ 12:4-5 で、こう教えてくださいました…。『4 そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。』って…。

そうして、この後、祭司長たちに扇動された群衆たちは、「イエス様のことを十字架につけろ！」ということ呼び続けて…、とうとう、その要求に対して、ピラトも屈してしまいます。彼もまた、総督という立場に居ながら…、神様の前に正しいことであるとか(未信者だが)、あるいは、政治的な正義を追い求めようとするのではなく…、自分の地位や待遇を守るべく、長いものに巻かれるような…、そんな弱い人物であったと言えるのではないのでしょうか？

実は、このピラトに関して、聖書のみことばでは、これ以降、彼について触れられてはいません。しかし、歴史家のエウセビオスなどの記述²によりますと、このピラトは、この何年後、当時のカリグラ帝によって、ガリアに流されて、そこで自殺したという伝承が残っているそうです。…自分の地位を守るために、大切なものを捨てて、妥協しても、所詮はその程度です。

< 励ましの言葉 >

さて、今日の冒頭でもお話しした通り、「集団心理、群集心理」というようなものもあってか、この当時の民衆たちの多くは、その周りの雰囲気や主張に流されてしまったのかも知れません。…前にも言いましたように、このわずか5日ほど前、イエス様がエルサレムへ入城なさった時も、そこに居た群衆たちが、ロバに乗ったイエス様に向かって、「ホサナ！ホサナ！今、救ってください！」などと言って、イエス様のことを歓迎したのも、ひょっとしたら、その集団心理が関係していたの“かも”知れません。

しかし、大切なのは、如何なる集団心理や、あるいは、脅迫などにも惑わされないような信念…、いえ、絶対に変わることのない真理に立つことです！そうじゃないのでしょうか？…ここ日本では、時々、「(キリスト)信仰を持つような者は、弱い者だ」というような考えを持つ人たちがおります。多分、私も過去、

教会に来る前は、何となく、そんな風に思っていたのかも知れません…。しかし、皆さんはどう思われます？過去、ここ日本で、キリシタンと呼ばれた信仰者たちは、その信仰が正しいか間違っているかは別として…、果たして、彼らは“弱かった”のでしょうか？…彼らは、時の幕府からの脅迫にも屈することなく、イエス様の十字架と復活を信じて、その信仰を棄てることなく、殉教していきました。果たして、彼らは、弱かったのでしょうか？

また、彼らキリシタンだけではありません。初代教会と言うか、あのローマがキリスト教を公認するまでの数百年間…、何十万、あるいは、何百万とも言われる多くのクリスチャンたちは、殉教することも恐れずに、イエス・キリストの十字架や復活を宣べ伝えていきました。彼らクリスチャンたちは迫害しても迫害しても増え続け…、殉教しても、一向にその勢いは衰えませんでした。いや、むしろ、迫害する方が、クリスチャンたちの数が増え続けていったのです。…だから、あのローマ帝国が、とうとう、クリスチャンたちを迫害することを諦めて、その逆にキリスト教を公認して、キリスト教を利用することに方向転換したのです。…そのために、今では、あのローマが、キリスト教の(と言ってもカトリックですが)総本山とさえ言われています。果たして、彼らも弱かったのでしょうか？

いいえ！彼らは皆、真の神であり…、唯一の救い主であるイエス様を信じて、大きく…、また、強く、正しい者たちへと変えられたのです！今日、私が最後、皆さんにお勧めしたいことは、どうか、今日、このメッセージを聞いてくださった方が一人残らず、このイエス様を真の神&私の救い主と信じ従う者となって、救われていただきたい！ということです。

そうして、もう既に、イエス様を信じて救われたクリスチャンの皆さんは、この世の中を恐れることなく…、また、この世の中での栄誉や成功というものを追い求めることなく…、ただ、この神様だけを恐れて、この神様の前に正しいことだけを追い求めて、残された人生を歩んでいっていただきたい！ということです。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。

² エウセビオスの「教会史」Ⅱ:7